

## サムエル記 「ダビデに見るキリスト」

### 1A 人物に見るキリストの証し

1B 罪の赦し(ヨセフ)

2B 忠実なしもべ(モーセ)

### 2A 神の国(ダビデ)

1B 王の油注ぎ

2B 人の国による苦しみ

1C 悪魔との戦い

2C 異邦人への逃亡

3B 即位

1C 柔和な人

2C 平和の造り手

## 本文

### 1A 人物に見るキリストの証し

#### 1B 罪の赦し(ヨセフ)

イエス様が、二人の弟子たちに対して言われた言葉、「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。(ルカ 24:26)」ということで、モーセからすべての預言者に渡って、ご自分について書かれていることを彼らに説き明かされました。そして私たちは、キリストにつく者たちも、キリストの苦しみの交わりにあずかっている、それゆえキリストの復活の姿にもあやかり、キリストの栄光にもあやかることを見ました。それをヨセフの生涯に見ることができました。

聖書は、キリストの生涯の物語です。福音書のみならず、創世記から黙示録までその主題が貫かれています。ヨセフの中には、神の罪の赦しのご計画が啓示されていました。兄たちに見捨てられたように、キリストも同胞のユダヤ人に見捨てられました。そして、エジプトにおいて指導者となりました。同じように、ユダヤ人によって拒まれた後に、世界中の異邦人の間でキリストの名があがめられています。そして、ヨセフに対して兄たちがひれ伏します。神の救いのご計画では、イスラエル人たちがイエスをキリストとして認める時に彼らが救われて、救いのご計画が達成されることを教えています。

そして、神は悪を善に返る方であり、兄たちがヨセフを捨てたことを、ヤコブの家の救いとしてくださいました。同じように、キリストを十字架につけた悪を、神は全人類を救う術としてくださいました。私たちにも、神がすべてのことを働かせて善としてくださる計画を神が持つておられます。その中に生きる時に、キリストの御霊が私たちにも働いて、私たちにできないことを代わりに主が私た

ちを通して行なってくださいます。赦せない人を赦すことができます。キリストに働いていただくのです。

## 2B 忠実なしもべ(モーセ)

そして、主に用いられ神の栄光を表した人物には、キリストを証しする御霊が働いています。例えば、モーセはそのような人でした。彼は 40 歳の時に、エジプト人がイスラエル人の奴隷を打ち叩いているのを見ました。それで、エジプト人を殺してしまいました。今度は、イスラエル人が他のイスラエル人をいじめているのを見たのです。それで正したところ、「お前は、俺をもあのエジプト人のようにするのか。」と言われたのです。エジプト人を殺してしまったことがもうばれていることに気づき、彼はエジプトを離れてミデヤンの地に住みました。

使徒行伝の7章でステパノは、「彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。(使徒7:25)」と言っています。モーセが初めイスラエル人を救おうと思った時に、彼らはモーセを受け入れませんでした。そのためにモーセは、異邦人のミデヤンの地に行きました。そこでイテロの家で嫁チツポラをもらったのです。そして 80 歳になった時に主に呼ばれて、エジプトに戻りました。その時にイスラエル人はモーセを自分たちの預言者として認めたのです。ここでも同じです。初めにイスラエル人を救う時には拒まれました。そして異邦人の間で受け入れられました。それから、二度目に来た時には受け入れられます。キリストの御霊が働いており、キリストを証しているのです。

モーセから何が学べるか？ 忠実な僕ということです。どんな状況になっても、主に命じられたことのみを行っていきました。イスラエルの民が任されたので、忠実に世話しました。時に嫌になる時もありました。彼らの前で怒り散らしてしまった失敗も犯しました。しかし、最後まで、約束の地に入るヨルダン川の手前まで彼らを無事に導いたのです。私たちも同じように、主に召されたこと、呼ばれたことを行っていく僕になることができるか、どうかであります。

## 2A 神の国(ダビデ)

このように、主と共に歩んだ人物の中にどんどんキリストを見ることができます。三回目の学びでは、イエスご自身がダビデの子と呼ばれた、ダビデを見ていきたいと思えます。まず、ダビデがいかに重要な人であったのか、それはマタイによる福音書 1 章 1 節にあります。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。」ここは正確には、こう書いてあります。「ダビデの子、アブラハムの子孫、イエス・キリストの系図」です。イエスがダビデの子であるということが、初めに出ています。

ダビデの世継ぎの子としてイエスがお生まれになりました。これがいかに重要であるかは、サムエル記第二 7 章にある神の約束にあります。ダビデが王となり、国も敵からの攻撃も減り、落ち着いてきました。そして彼は王宮に住んでいましたが、そこで神の箱が天幕の中にあります。自分が

杉の家に住んでいるのに、どうして神の箱が天幕にあるのか？と思いました。そして、友人であり預言者であるナタンに、神の家を建てたいと尋ねてみたのです。ナタンは、「あなたの心の思いのままにやってみてください。」と言いました。ナタンも嬉しかったのです。ところが、主がナタンに語られて、そうではないことを語られました。それをナタンがダビデの話したのです。それは、ダビデが神の家を建てるということ以上の、とんでもない恵みでした。それは、神が彼のために家を造ってくださるということです。家といっても、建物の家ではなく、家系を造るということです。

そして、こう語られました。サムエル記第二 7 章 12-13 節です。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」ダビデの死後に、ダビデから出てくる世継ぎの子が王国を確立させます。それが、とこしえまでも続くものである、ということです。このことばをダビデが聞いた時に、これは人間の子ではなく、神からの子、キリストご自身のことを指していることを気づきました。それで、彼は言葉にならぬ神への祈りを捧げています。イザヤ書 9 章にあるように、ダビデから出てくる子は、男の子として生まれるが、けれども神から生まれる方、神の御子であることが宣言されています。ダビデの子として生まれた方が、神の国をこの地上に建てられるのです。

### 1B 王の油注ぎ

私たちは、元々のことを考えてみましょう。私たちは二つの国のいずれかに住んでいます。それは神の支配の中にいるか、それとも自分を中心して生きているかの二つの国です。神の国の中にいるのか、それとも人間の国、あるいは自分の国と言ってもよいでしょう、その二つの中のどちらかに住んでいます。主なる神は初めに、ご自分に似せた者と造られました。そこでは、人は地を支配するように命じられました。神により頼むことによって、この方の言われることをそのまま聞いて、従っていくことによって、それでその大きな支配をするように召されていました。ところが、罪を犯します。それ以来、自分自身が神のようになる、つまり神抜きで善悪の判断をし、神から独立して自分の生活を支配しようとし始めたのです。ですから、神の国から人間の国が入り込んでしまい、そこに争いや悩み、苦しみが入ってしまいました。

そこで、主はご自分の国を取り戻す、回復される計画を立てておられました。神はアブラハムを選ばれました。そして彼の名を大きくし、強い国を立てることにしました。それで、アブラハムの子孫からイスラエルが出てきて、そのイスラエル人に神は掟を与えられました。神に従って生きる人々の間で、神の国が広がることを願われたのです。ですから、神は預言者を立てられ、その預言者が神の言葉を語ることによって、人々がそれに従うことによって神の支配が広がることを願っておられました。また、祭司の働きによって、人々がいけにえによって、その流された血によって神に近づくことができるようにしました。私たち教会も同じですね、神の言葉を聞き、それから聖餐にあずかることによって、そこに神の国が広がります。

ところが、イスラエルは預言者を拒みました。サムエルの時です。サムエルが預言者として立てられ、彼が神の言葉を語り、人々がそれに聞き従って国が成り立っていました。しかし、形が整っていません。いちいち神の言葉に頼りながら、信仰によって進み、祈り、そうやって形が無いままにやっているのが、嫌になりました。そうではなく、ただ周りの国々のように人間の王がいるならば、それで王が国を守り、救ってくれるではないかと思ったのです。ですから、神の国を拒んで、人の国を選んでしまったのです。

サムエルはこのことで傷つきました。自分が心を尽くして主に仕え、民に仕えていたのに、彼らはサムエルを退けたからです。けれども主は、「あなたではなく、このわたしを退けたのだ。」と言われました。けれども主は、彼らの要求に合わせて、一人の王を立てられました。サウルと言います。そしてサウルを選ばれた後に、「もし主を恐れて、主に仕え、主の御声に聞き従っているなら、王も、あなたがたもわたしに従うなら、それでよい。もし従わないなら、主の手があなたがたに下る。」と言われました。ですから、主に聞き従う分において、人が王として立てられていても、神の統治が続きます。

ところがサウルは、主の命令に聞き従いませんでした。自分の思っていること、自分のやりたいことを優先させました。アマレク人を全て殺しなさいと命じられたのにそれを行いませんでした。それで彼から王位が取り上げられます。そして、主は新たにご自分の選ばれる油注がれる者、王を決められたのです。それがダビデです。ダビデは、中学生、高校生ぐらいの男の子だったことでしょう。しかし、主がサムエルに、エッサイの家に行きなさいと命じられました。ダビデはその末の子でした。長男を見て、「これが主の選ばれた王に違いない。」と思ったら、「人はうわべを見るが、主は心を見る。(1サムエル 16:7)」と言われました。今の国もそうですが、政治的な指導者になる人は、やはり格好良くないといけません。アメリカの大統領選では、どのように映るのか、そのイメージ戦略がとても大事だと聞きました。けれども、神はご自分の国を立てようとされていたのです。ダビデを選ばれる時に、目に見える所ではなく、見えないところにおいて、その心に働きかけることにおいて、ご自分の国を立てようとされていました。それで、サムエル記第一 16章 13節を読みます。「サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真中で彼に油をそそいだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。」

## 2B 人の国による苦しみ

ですから、サウルは王位から退けられており、少年ダビデが選ばれた王でした。けれども、サウルは依然として王位に付いていました。ある時に、大きな戦いが起こりました。ペリシテ人との戦いで、エラの谷でペリシテとイスラエルが対峙しました。ゴリヤテという巨人が現われ、イスラエルの神をなぶっています。それを、兵士であったお兄さんたちのための弁当を持ってきたダビデの耳に入りました。それで、彼は怒ります。サウルが、ダビデが戦うと聞き、それで出ていかせます。ゴリヤテは、武具については重装備でしたが、ダビデは「1サムエル 17:45 おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」それでダビデがゴリヤテを

倒します。

それからサウルのところで、ダビデは家来として働くことになります。その時にヨナタン、サウルの息子がいました。ヨナタンは、ダビデを自分と同じように愛し、それで何と自分の上着を脱ぎ、自分の鎧兜をかぶせ、剣、弓、帯までも与えました。これはヨナタンは、サウルの息子であり彼の跡付きでありましたが、そうではなく選ばれているイスラエルの王はダビデであることが分かっていたからです。それで、王の息子の地位を示すこれらの武具をダビデに渡したのです。

### 1C 悪魔との戦い

それでダビデはサウルの下で仕えている中で、ペリシテ人との戦いに連勝しました。ところが、ある時に女たちが歌っていました。「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。(1サムエル 18:7)」それでサウルは非常に怒りました。自分よりも優れていることに激しい妬みを抱いたからです。それからサウルはダビデに殺意を抱きました。そして事ある毎に、殺すことを意図します。そのことを家来たちの前で公言するに至りました。ヨナタンは、それを改めて確かめます。やはり、サウルはダビデを殺すことを本気で考えていました。そこからダビデの逃亡生活が始まります。

このように、ダビデが確かに油注がれた王であり、サウルは神からその王位を退けられていたけれども、それでもサウルが王であり続け、しかもサウルがダビデを殺そうとしているという自体があります。このような曲がったこと、不条理な状態に心が耐えられないかもしれません。しかし、人の国の中に神の国が攻め入っているのだ、ということなのです。人間によって立てられたサウルがいます。そして神によって立てられたダビデがいます。それで肉による者が御霊によるものを迫害しているのです。私たちは、絶えず自分の内の中で霊と肉の戦いがあります。主が始められた御霊の働きが、自分が従来から持っていた肉の思いが必死になって反抗していくのです。また、教会の中でも起こるでしょう。御霊によって始まったことを、私たち人間が肉によって妨げてしまいます。

そして、このダビデの姿とサウルの姿は、まさにキリストご自身と悪魔の姿を表しています。マタイによる福音書 4 章を開きましょう。「1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野の上へ行かれた。2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」4 イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」7 イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」10 イエ

スは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」<sup>11</sup>すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。」

イエスが水のバプテスマを受けられときに、聖霊が鳩のように降りてきて、父なる神が、「これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と言われました。そして御霊に導かれてイエス様がここ荒野で誘惑を受けられました。なぜなら、地上は未だに悪魔がこの世の神となっていたからです。そして徹底的にイエス様がつまずくように仕向けましたが、イエス様は拒まれます。そして、8 節に注目してください、悪魔はこの世のすべての国々と栄華を見せました。そしてイエス様はそのことを否定されませんでした。確かに悪魔は、これらのものを自分のものにしていたからです。しかし、イエス様がすでにダビデの子であられ、かつ神の御子としての認証を御霊によって受けておられたのです。ちょうどそれは、ダビデが油注がれたのに、それでもサウルが王位に付いていて、ダビデに働かれる御霊について妬みを抱き、それで迫害しているのと同じです。

そしてイエス様は、彼の申し出を断られました。主はいずれ、全ての国々をご自分のものとされます。すべての国々がキリストの御国となるのです。しかし、主はそれをすぐに手に入れることをなさいませんでした。なぜなら、それはご自身の命、そしてその流される血によって買い取られるものだからです。主は、これらの栄光をへりくだり、父なる神に仕えることによって、十字架の死に至るまで従われることによって得ることになります。

そしてダビデ自身にも、その姿が出てきます。彼は決して、自分自身の手で王位を奪還しようとはしませんでした。むしろ、サウルに手を下すことができる時にそれをしませんでした。ここが、ダビデの生涯の特徴です。私たちがダビデから何を学ぶことができるのか？それは、「主が手を下される」ということ。主なる神が主権を持っておられるということ、この方に自分を明け渡し、王になることについて自分がそうなるのではなく、神がそうしてくださることを知っていました。ダビデは礼拝者です。彼は、後に神の箱をエルサレムに運びこみ、主を礼拝することが何よりも彼の情熱でした。つまり、主ご自身が王であられ、自分は王であったけれども、あくまでも神が王であるという礼拝者だったのです。

ダビデが逃げている時に、その大きな出来事が二つあります。エン・ゲディで逃げている時、彼らが隠れていた洞窟に、たまたまサウルが中に入ってきました。彼が用を足していました。そして、こっそりとダビデはその着物のすそを切りました。しかし、このことさえも彼の心は痛んだのです。彼は、ほんの少しでも彼に復讐する、仕返しをすることに心を痛めたのです。そしてサウルが出ていった後で、その着物のすその切れを見せました。そしてこう言っています。「1サムエル 24:11-12 わが父よ。どうか、私の手にあるあなたの上着のすそをよくご覧ください。私はあなたの上着のすそを切り取りましたが、あなたを殺しはしませんでした。それによって私に悪いこともそむきの罪もないことを、確かに認めてください。私はあなたに罪を犯さなかったのに、あなたは私のいのちを取ろうとつけねらっておられます。どうか、主が、私とあなたの間をさばき、主が私の仇を、あなた

に報いられますように。私はあなたを手にかけることはしません。」主が裁いてくださる、だから私はそれに手を下さないとしたのです。その力があっても、それを敢えて行使しない、と言っています。これがダビデの生活に、自分の力ではなく神の御霊が働いた決め手です。

けれども、彼が間違えそうになったところを、神が一人の女を通して教えてくださいました。ナバルという男がいましたが、非常な金持ちで、たくさんの羊や牛を飼っていました。ダビデたちは、その羊飼いを守る護衛を行っていました。それで祝いの時に少しご馳走を分けてほしいと願いました。ところが、ナバルは送られた若者たちを蹴散らしたのです。それでダビデは怒り心頭でした。彼は、木っ端みじんに殺そうと考えて出ていきました。ところがナバルの妻アビガイルは、すぐにごちそうを作り、それをロバに載せて持って行きました。そしてダビデが進むのを、ひれ伏しながら懇願してやめさせることができました。こう言っています。「1サムエル記 25:30-31 主が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。主がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしためを思い出してください。」彼女はすでに、ダビデが王になることを知っていました。そして、王になった時に、このことがつまずきになることがないようにと言っているのです。そしてダビデは彼女の言葉に感動しました。一時的な衝動で殺しに行こうとしたけれども、主が手を下してくださるということをおぼれていたのです。そしてナバルは十日後に死にました。主がしてくださったのです、自分ではありません。復讐は主にあり、自分にはないのです。

さらに、もう一つ、同じようにダビデたちが簡単にサウルを殺すことができる時がありました。サウルが陣を敷いて、寝ている時にそのそばにある水差しと槍を取ってきました。その時に、部下にこう言っています。「1サムエル 26:10-11 主は生きておられる。主は、必ず彼を打たれる。彼のその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。私が、主に油そそがれた方に手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。さあ、今は、あの枕もとにある槍と水差しとを取って行くことにしよう。」サウルについては主が打たれるということをおぼされていたようです。

そしてサムエル記第一は、サウルが死ぬところで終わります。

## 2C 異邦人への逃亡

ところでダビデは、逃亡している時に異邦人の国々にお世話になったことがあります。一つはモアブです。自分の両親をモアブ王に任せました。彼らの曾祖母がルツでありモアブ人だからです。そして、ペリシテ人のアキシュのところにダビデたちが住んでいたことがあります。敵のところにいれば、サウルは追ってくることはないからです。けれども、それは信仰が薄れてしまったからに他なりません。しかし、原則的にイスラエル領内にいれば、そこはサウルの支配ですから、彼は異邦人のところにいるほうが楽なのです。それで再びキリストの働きです。イエス様はユダヤ人のために来られたのに、拒まれたので異邦人の間でその御名が受け入れられました。

### 3B 即位

#### 1C 柔和な人

しかし、サムエル記第一の最後でサウルが死にました。ダビデはヘブロンでユダの王となり、北のイスラエルはサウルの息子イシュ・ボシエテを王に立てました。それから内戦が始まりました。しかし、これから彼が北のイスラエルとユダの統一した王になっていくのですが、彼は決して戦いを好みませんでした。

まず、サウルが死んだ後に、アマレク人が嘘の報告をしました。サウルが死にかけていたので、その最後の一刻しを私が行ないました、と言ったのです。それでダビデは、「よくやった！」とはいいませんでした。ダビデは激しく悲しみました。サウルまたその息子ヨナタンが死んだからです。全く反対の反応をしました。そしてアマレク人を処刑したのです。そう、自分で手を下す者、自分で裁く者は裁かれることを示すためでした。イエス様が「裁いてはなりません、裁かれないためです。」と言われましたが、神のみが裁かれるのです。

そして戦っている時に、サウル家の將軍アブネルがダビデのところへやってきました。そして、北イスラエルをユダに明け渡すといったのです。ダビデは喜びました。平和裏にイスラエルが統一されるからです。ところが、それを將軍ヨアブが殺してしまったのです。ダビデは悲しみました。喪に服しました。それで人々が、このことはダビデから出たことではないことを知りました。そしてついに、イシュ・ボシエテが略奪隊に殺されます。そして、イシュ・ボシエテの首をダビデのところへ持ってきます。「よかった、良い手柄だ」といいませんでした。どうしましたか？ダビデは行ったのです。「2サムエル 4:10-11 かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました。』と告げて、自分自身では、良い知らせをもたらしたつもりでいた者を、私は捕えて、ツィケラグで殺した。それが、その良い知らせの報いであった。まして、この悪者どもが、ひとりの正しい人を、その家の中の、しかも寝床の上で殺したときはなおのこと、今、私は彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除き去らないでおられようか。」

#### 2C 平和の造り手

そして、ダビデは王となります。イシュ・ボシエテが死んだ今、イスラエルの人たちがダビデのところへ来て、こう言いました。「2サムエル 5:1-3 イスラエルの全部族は、ヘブロンにダビデのもとへ来てこう言った。「ご覧のとおり、私たちはあなたの骨肉です。これまで、サウルが私たちの王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのは、あなたでした。しかも、主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる。』」イスラエルの全長老がヘブロンに王のもとへ来たとき、ダビデ王は、ヘブロンで主の前に、彼らと契約を結び、彼らはダビデに油をそそいでイスラエルの王とした。」逃亡していた時から、動かしていたのはダビデであったと言っています。そして約束もダビデに与えられていたことを知っていたのです。このように、御霊による働き、そこに広がる神の国は、反対や迫害、困難な中であっても前進するのです。

ダビデの生涯には、一つの特徴がありました。イエス様が八つの幸いを山上の垂訓で語られました。「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」この「柔和」という言葉、ギリシヤ語では反対語がなにかと言いますと、「復讐」だそうです。つまり、柔和とは復讐しない、仕返しをしないということです。ダビデの生涯は、復讐は主にあるということを徹底させていました。裁かないということを徹底していました。それは我慢することではなく、むしろすべて主権を神に明け渡し、それで神がされることに自分を任せるのです。そのようにしている人は、地を相続すると言っていますね。ダビデはイスラエルの地を相続しました、王となりました。

そしてこれがキリストご自身を示しています。キリストが裁きを父なる神にお任せてして、十字架上で死んでくださいました。しかし神がキリストを死者の中から甦らせ、引き上げて、あらゆる名にまさる名を与えられました。そして主は今、神の右に着いておられます。そして戻ってきます。その時には確かに、王の王、主の主として来られます。そして世界を統治する王となるのです。

最後に、ダビデの失敗も取り上げましょう。彼にとっての汚点は、もちろん、バテ・シェバとの姦淫、そしてその夫ウリヤの殺人ですね。ダビデが犯したこと、それは姦淫、殺人という罪以上に、いやその罪の背後にあるものが深刻でした。それは、「主が加えて与えられるのではなく、自分の手で取った。」ということです。「2サムエル 12:7-9 わたしはあなたに油をそいで、イスラエルの王とし、サウルの手からあなたを救い出した。さらに、あなたの主人の家を与え、あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し、イスラエルとユダの家も与えた。それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えたであろう。それなのに、どうしてあなたは主のこぼれをさげすみ、わたしの目の前に悪を行なったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。」そして、剣が彼の家から離れなくなりました。手を下さない時は、平和な人として生き、神による王国が広がったのに、手を下したので争いが自分の中に入ってきました。裁くと、裁かれます。神のみが裁かれるのです。

しかし、ダビデは悔い改めました。そしてその後に剣が去りませでしたが、それでも彼は主にすべてを明け渡していました。その罰も、甘んじて受けました。彼は、主の厳しさの中にも、憐れみがあることを信じて、信頼していました。それがとてつもない彼の、主によって練り清められた人格です。主ご自身を深くしていたので、その裁きさえも甘んじて受けることができたのです。そして、確かに彼の王国は確立し、ダビデはその息子ソロモンに引き継ぐことができたのです。

こうしてダビデを見ていきました。彼の生涯からキリストを見ることができ、彼の生涯からキリスト者の生きる道を習いました。